

## 十字架を担がされた人

細井 茂徳

先週の聖書箇所、ポンテオ・ピラトのもとでイエスを十字架刑に処す決定が下されました。今日の箇所は、処刑場であるゴルゴタの丘までイエスさま自ら材木を担いで引かれていく途中、その十字架を担いだ人がいたということを告げています。「キレネ人シモン」です。シモンは自らの意志でここに来たというよりも、たまたま歩いていたら遭遇したということなのでしょう。彼はイエスのことを何にも知らなかったはずです。おそらく体格もよかったです。そんな彼がローマの兵士たちによっていきなりイエスの十字架を無理矢理背負わされたのです。それは、ただ無理矢理肉体労働をさせられたというだけの話でなく、それこそ周囲の人々からはまるで自分が犯罪人であるかのように見られる、人々の軽蔑のまなざしと蔑みの中を、死刑囚と一緒に歩かなければならない、そういうことを味わわされたのです。イエスという男がこの時受けていた辱めを自分も引き受けなければなりません。その意味では、体のみならず心においても、重荷を無理に強いられるという体験であったのだと思います。ただの肉体労働ではすまない、大きな重荷を、シモンは背負わされたわけなのです。

聖書は、このシモンの姿の中にキリスト者の姿を描いてみせているのです。かつて主イエスは弟子たちに向け「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って(今朝の箇所と同じ言葉)、わたしに従いなさい」(ルカ 9:23)と語られました。主に従う者は主が負って下さる十字架のほんの一端を人生で担わせて頂くのです。結局、主が刑場で磔られ死なれたその十字架を、この世にあって一時担がせて頂くのです。そうした経験を通して、私たちは信仰を与えられ、次の世代(ローマ 16:13 の「アレクサンドロとルフォス」はシモンの息子たち)へと受け継いでいくことができるのです。この十字架は、輝かしい復活へと続く十字架です。私たちも信仰の子たちを生み出す十字架を共に背負う恵みに与らせていただきたいと思います。